強者の戦略

東大日本史のみかた 41〔解答編〕

こんにちは。日本史の岡上です。さて，今回は古代において漢字や書（書法）がいかにして普及していったのかを問う問題でした。文字の普及に関する問題は過去にも出題されていますが（東大 2004 年第 1 問），今回は資料文を読み解いていく形式の出題でした。

それでは解説を始めていきましょう。

＜中央と地方における文字の普及＞

設　問

A　中央の都城や地方の官衙から出土する 8 世紀の木簡には，『千字文』や『論語』の文章の一部が多くみられる。その理由を 2 行以内で述べなさい。

問われているのは，中央の都城や地方の官衙から出土する 8 世紀の木簡に，『千字文』や『論語』の文章の一部が多くみられる理由。まずは『千字文』，『論語』がどういう性格の書籍なのか，確認していきましょう。

(1)　『千字文』は 6 世紀前半に，初学の教科書として，書聖と称された王羲之（おうぎし）の筆跡を集め，千字の漢字を四字句に綴ったものと言われる。習字の手本としても利用され，『古事記』によれば，百済から『論語』とともに倭国に伝えられたという。

(3)　大宝令では，中央に大学，地方に国学が置かれ，『論語』が共通の教科書とされていた。大学寮には書博士が置かれ，書学生もいた。長屋王家にも「書法模人」という書の手本を模写する人が存在したらしい。天平年間には国家事業としての写経所が設立され，多くの写経生が仏典の書写に従事していた。

まず『千字文』ですが，「6 世紀前半に，初学の教科書として，書聖と称された王羲之の筆跡を集め，千字の漢字を四字句に綴ったもの」であり「習字の手本としても利用され」たとあります。要は**漢字を学ぶための基礎的な書籍**ですね。

一方，『論語』は孔子の言行を弟子達が記録した儒学の書籍であり，『千字文』とは性格の違うものです。ただ大宝令で設置された大学・国学の「共通の教科

書」であったという記述から，当時，**中央官人も地方官人も共通して学んだ書籍**であったということがわかります。

ではなぜ，当時の中央官人・地方官人は『千字文』や『論語』を学ぶ必要があったのでしょうか。その理由がみえるのが資料文(4)です。

> (4)　律令国家は６年に１回，戸籍を国府で３通作成した。また地方から貢納される調は，郡家で郡司らが計帳などと照合し，貢進者・品名・量などを墨書した木簡がくくり付けられて，都に送られた。

資料文(4)には律令国家において中央と地方の行政が戸籍や計帳を用いて行われている様子が記述されています。もちろん戸籍・計帳は漢字で記されていますので，**当時の中央官人・地方官人とも文書行政を実施する上で漢字の読み書きの能力は必須**であり，そのために『千字文』などが利用されたものと考えられます。また『論語』に関しては漢字の読み書き能力の向上というだけでなく，その書籍の性格から考えて**中央官人・地方官人が為政者としていかにしてふるまうのかを参照した書籍という意味合いもあったかもしれません。**

では最後に何故「木簡に『千字文』や『論語』の文章の一部」が書かれたのかを考えていきましょう。まずここで押さえておきたいのは「木簡」の特徴です。木簡は堅牢な一方で加工や削り直しが可能であることから，役所の日常的な文書や都への貢進物の荷札などに利用され(これは資料文(4)にも記述がありました)，紙の文書とは使い分けられていました。**特に削り直しができることから漢字・漢文習得の練習用としても利用されました**（これを「習書木簡」と言います)。この木簡の特徴を考えたとき，問題文の「一部」という表現の意味が理解できます。「全部」ではなく「一部」なのは，**中央の都城の中央官人や地方の官衙に勤める地方官人が日常的に木簡に『千字文』や『論語』の「一部」を書いて，漢字・漢文の練習をしていた証拠**といえるのです。

以上をまとめて，解答を作成してみましょう。

【解答例】

Ａ律令国家においては文書行政が基本であり，そのため中央官人・地方官人ともに木簡を用いて漢字・漢文の習得をしていたから。(59 字)

強者の戦略

＜唐の書法の普及＞

設　問

B　中国大陸から毛筆による書が日本列島に伝えられ，定着していく。その過程において，唐を中心とした東アジアの中で，律令国家や天皇家が果たした役割を４行以内で具体的に述べなさい。

問われているのは，中国大陸から毛筆による書が日本列島に伝えられ，定着していく過程において律令国家や天皇家がどのような役割を果たしたのか。条件としては，唐を中心とした東アジアの中で考えることが求められています。

まず，「伝えられ，定着していく」という点に着目して資料文を確認していきましょう。

(2)　唐の皇帝太宗は，王羲之の書を好み，模本（複製）をたくさん作らせた。遣唐使はそれらを下賜され，持ち帰ったと推測される。

資料文(2)では，推測ではありますが唐の皇帝が好んだ王羲之の書が遣唐使に下賜され，持ち帰られたとあります。つまり書が日本に伝えられた段階のことが記述されています。

(5)　･･･平安時代の初めに留学した空海・橘逸勢も唐代の書を通して王羲之の書法を学んだという。

一方，資料文(5)では，空海・橘逸勢が唐代の書を通して王羲之の書法を学んだという記述があり，彼らが三筆と呼ばれたことを想起すれば，中国大陸から伝来した毛筆による書が僧や貴族（嵯峨天皇まで考えれば天皇家も）といった日本の文化の中心にあった人々に受容され，定着していったことがわかります。

ちなみに日本に伝えられ定着していったのが一貫して王羲之の書法であったのは，そもそも王羲之の書を唐の皇帝が好んでいたことに由来すると考えられます。条件にある「唐を中心とした東アジアの中で」からもわかるように，**８世紀においては唐が文化の中心であり，その唐で好まれた書法が，日本においても受容されていった**のでしょう。

さて，あとはこの資料文(2)の「伝えられた」段階から，資料文(5)の「定着していく」段階の過程における，①律令国家の役割 と ②天皇家の役割 を明らかにすればよいわけです。それでは関連する資料文を確認していきましょう。

(3)　大宝令では，中央に大学，地方に国学が置かれ，『論語』が共通の教科書とされていた。大学寮には書博士が置かれ，書学生もいた。長屋王家にも「書法模人」という書の手本を模写する人が存在したらしい。天平年間には国家事業としての写経所が設立され，多くの写経生が仏典の書写に従事していた。

(5)　756 年に聖武天皇の遺愛の品を東大寺大仏に奉献した宝物目録には，王羲之の真筆や手本があったと記されている。光明皇后が王羲之の書を模写したという「楽毅論（がっきろん）」も正倉院に伝来している。平安時代の初めに留学した空海・橘逸勢も唐代の書を通して王羲之の書法を学んだという。

①律令国家の役割

・大学寮には書博士（毛筆の書を教授する学者）が置かれ，書学生（毛筆の書を学ぶ学生）もいた

・国家事業としての写経所が設立され，多くの写経生が仏典の書写に従事していた

これをまとめると，**律令国家は大学（中央官人の育成機関）において毛筆による書の教育をおこない，**

国家事業としての写経もおこなった，となります。

②天皇家の役割

・長屋王家にも「書法模人」という書の手本を模写する人が存在したらしい

・聖武天皇の遺愛の品に王羲之の真筆や手本があった

・光明皇后が王羲之の書を模写した

これをまとめると，**天皇家は王羲之の書を所蔵したり模写したりし，また天皇家に連なる王家でも書の模写がおこなわれた**，となります。

このように律令国家，天皇家がそれぞれの役割を果たすなかで，中国大陸から伝えられた毛筆による書が定着していったのです。

以上をまとめて，解答を作成しましょう。

【解答例】

Ｂ唐の皇帝が好んだ王羲之の書が遣唐使によって伝えられた。東アジアにおいて唐は文化の中心であったため，律令国家は大学において書法の教育をおこない，国家事業として写経もおこなった。一方，天皇家は王羲之の書の所蔵や模写をおこない，書法は定着した。(120 字)

さて，みなさんの解答はいかがだったでしょうか？

論述問題の解答はもちろん一つではありませんので,「これはどうだろうか？」と自分では判断つかないものは必ず,添削してもらうことをお勧めします。この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので，どしどし送ってきてくださいね。

それでは，今回はこの辺にいたしましょう。次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに！！